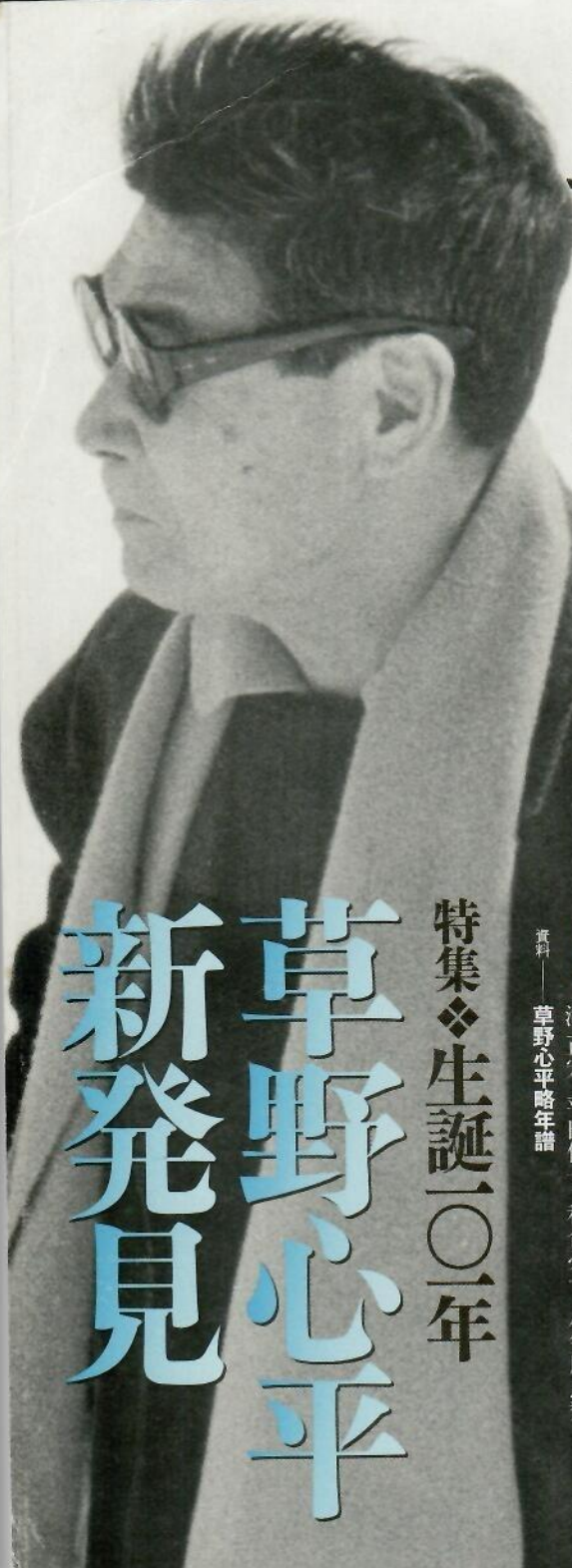


現代詩手帖

modern daishi techo
monthly
june 2004

6



特集◆生誕二〇二年 草野心平 新発見

- 新資料
草野心平日記
- アンソロジー
草野心平詩抄
- 座談会
入沢康夫＋晒名昇＋田野倉康一 司会
「日記と作品を結ぶもの」
- 討論
栗津則雄＋池井昌樹＋城戸朱理
「心平詩の宇宙」
- 備考
エッセイ
辻井喬、佐伯彰一、新藤涼子、深澤忠孝、
財部鳥子、吉田文憲、井坂洋子、野村喜和夫、
澤正宏、平田俊子、和合亮一、小笠原鳥類

資料——草野心平略年譜

発行所 日本文学館 四十七番地 六号 東京都千代田区

ジェローム・ガムは、ここ数年その活動が注目されてきた、フランス人の若手詩人である。英語とフランス語で詩作し、現在までにフランスで七冊の詩集、イギリスで英語の詩集が二冊出版されている。また、フランス現代詩人の英訳、イギリス詩人の仏語訳も多い。詩作はもとより、批評の分野で旺盛な活動を見せている書き手である。

本作品は「事態を直書きすること、または」という題の元にとめられた連作詩の三作目（「事態を直書きすること、または」二〇〇三年、アンヴァンテール・アンヴァンション社刊）。ガムは自らを「RLG」(Revue de Littérature Générale) ビエール・アルフェリとオリヴィエ・カディオにより一九九五年に創刊された雑誌。二号しか刊行されなかったが、後の世代のみならず、前世代にまで影響を与えた伝説的な雑誌に衝撃を受けた世代だと語っているが、実際、母音省略、句読点、断片化等の特徴に、その明らかな影響を見ることが出来る。

ガムの場合、こうした特徴を、殆ど読解可能性の極限にまで多用しており、特に最近の作品は、読者と自分に対しての読解性の挑戦のようになってきている。尚、この作品でカタカナで訳されている部分は、もとはスペイン語で書かれていて、フランス語の読者にとって読解がさらに困難になっている。ここでは、おそらく入管での移民と役人との会話と、そこでの相互理解の不可能性といったものと、テキストの添削・揺れ・うねり・分解・飽和といったものをもたらし「詩」に関する言及が「直書きで」交錯している」と読むことができるだろう。

詩と音の関係をより広く本質的なものとして捉えようという試

みは、ラジオ局、フランス・キェルチエールのために彼が制作した一時間番組の中に如実に現れている。ここで彼は、狭義の「音声詩」の詩人として捉えられている詩人に限らず、朗読とは関係の薄いと思われる現代詩人にも朗読させ、詩と音の関係についてインタビュアーすることで、詩の中に含まれる音の要素を、「音声詩」というジャンルに特有の問題として切り離すのではなく、詩を書く者全てに関わる問題として提示しようとしている。彼自身、いわゆる「音声詩」詩人のカテゴリーには入らないと認識しているようだが、作品を見ても、文字と音の関わりに深く魅せられていることは明らかであるし、彼の朗読は作品のそういった要素を際立たせている読み方であるように思われる。和訳でも出ている単語の部分省略などは、朗読で聞いたときにまた別の印象を与えられる要素だと言えるだろう。朗読CDも出しているし、また、イギリス詩人を招いての朗読会を定期的に企画するなど、詩と音に関する思考を積極的に具体化している。

ガムの仕事における、朗読の多様な実践と、英語と仏語の二言語での詩作という、一見独自に思われる活動は、同時に、若い世代のフランス人詩人に共有する傾向を浮き彫りにするものでもある。エマニュエル・オカールやクロード・ロワイエリッシュルヌーなど、二世代前の詩人が率先して道筋をつけてきたアメリカ現代詩の紹介はオリヴィエ・カディオやビエール・アルフェリなどの次世代にも受け継がれ、共同翻訳や雑誌での翻訳発表を通して、もはや特定の牽引役を必要としない程にアメリカ現代詩との関わりは密になっている。現在の二十代、三十代はその恩恵を直に受けた世代で、アメリカ現代詩の最も新しい部分を多くフランス語で読むことが出来たお陰で、それらを「外国文学」として読むの

ではなく、ごく自然に自らの同時代として作品を受容しているようだ。代表的な活動としては、英語圏の作品と、イメージの「翻訳」までを含めた「翻訳作業」だけをテーマとした詩誌「イシュー」、仏詩人の英訳、英語圏詩人の仏語訳を行った上で、それぞれ二カ国語クロスでの朗読を月一回のペースで行うアンソロジー「ダブル・チェンジ」などがあるが、詩人個人の活動としても、また二十代半ばながら、アメリカ現代詩を全て翻訳してしまうのではないかという勢いの翻訳者マルタン・リジエ、アメリカ人で英語を母国語としながら、初めての詩集をフランス語で出版したチャット・ウィナー（彼はその英語訳を自分で行わず、別の翻訳者に英訳させている）、英語とフランス語でそれぞれ別の作品を書くステイシー・ドリスなど、アメリカ現代詩とフランス現代詩の問題系はいよいよ密接に絡まりながら、興味深い発展を見せていくのではないかとと思われる。

また、朗読に関しても、詩人が自作を読めばそれで朗読会になる、という発想は薄れ、各詩人が工夫を凝らしはじめている。その成果はまだ玉石混交ではあるが、映画を詩の問題として捉えることに見事に成功したビエール・アルフェリの「シネポエム」シリーズや、パーカッションと自らの写真を組み合わせ、前古典期ギリシャ哲学のテキストを下地としたテキストで異界の舞台を立ち上げるスザンヌ・ドゥベルトなど、興味深い試みはあちこちで見られている。サイト上で雑誌を発行する事から活動を始めた「アンヴァンテール・アンヴァンション」は、最近、サイトの書き手の作品を廉価な書籍として出版する企画を起し、ヴィレット劇場で大規模な朗読会を行っている。劇場を朗読会場とする事自体はさして珍しいことではないが、常に二百人以上の集客率を誇る朗読会はかなり例外的だといえ、七百円前後という叢書の価

格設定も相俟って、若い読者層を獲得しつつある。ジェローム・ガムの仕事の特色は、そういったフランス現代詩全体の状況の中で必然的に生まれきたものだといえるだろう。

ジェローム・ガムは昨年暮れに来日し、十二月一日、東京日仏学院で講演会を行なった（次頁より掲載）。当日は、講演会に続いて、この講演会を企画したアニエス・ティンソンの招きにより参加した吉増剛造氏が「絵馬」の一部を朗読、その仏訳を訳者である関口涼子が行った。その後の質疑応答の中では、吉増氏もジェローム・ガムも、テキストを声にしていくという行為が、テキストの変性を生み出し、予め決定している事柄を動かす力を持つという点で一致していた。また、共に母語以外の言語で詩作を行うガムと関口の間で、外国語で朗読するとはどういうことかを巡っての対話も行われた。吉増氏が行う日本語とその翻訳の同時朗読に関して、二年前に行われた吉増氏との対話の中で私は「二つのテキストを同時に読むことによって、聞こえない部分が出てくる、その聴こえない部分がおもしろい」とコメントしたことがあったのだが、それを受けて吉増氏は「聞こえない部分が詩に入ってくるように、カゲの行が立ってきている」と、講演会のタイトル、「聞こえるもの、聞こえないもの」と呼応する諸問題が提示されていた。

通常「音声詩」と訳されることの多かった *poésie sonore* を、ここでは、吉増剛造氏の提案により、「音詩」という訳語をつけることになった。狭義の「音声詩」の捉える問題に留まらず、新しい用語をつくることによって、仕切直しをするように、改めて詩と音の関わりを捉え直していきこうという吉増氏の姿勢が反映されている訳語だと思われる。